

瀬戸内播州赤穂から北前船がもたらしたものの14号全国版

平成 28年 12月 14日



現在の「かねやす」



「かねやす」の堀部安兵衛の書いた看板



大高源五の書いた看板
芝兼安では赤穂の焼塩を
歯磨き用として売っていた



12月には忠臣蔵の新説が紹介される事が多く、今年も西本願寺から新たな資料がでていました。2008年12月には日経ビジネスが東京医科歯科大学名誉教授の故長谷川正康著「歯の風俗誌」を紹介しました。元禄の刃傷事件を赤穂塩と吉良塩の確執から、面白く書かれていたので今回はその中にあった赤穂塩の話です。その大筋は以下のようなものです。

5代将軍綱吉に歯磨き用として赤穂塩を献上して以来、江戸では「赤穂塩」といえば歯磨き用の塩を意味するようになり、「赤穂名産花形塩」として江戸で評判になって、赤穂塩の江戸への進出がめざましくなっていた。

それまで将軍家へ献上してきた吉良家の「饗庭塩」は、「赤穂塩」が綱吉に献上されてから「赤穂塩」に代わられて江戸では面目を失い、吉良家にとって浅野家は意識せざるをえない存在になり、これが吉良と浅野の不仲の遠因だったと話が展開されていました。

この将軍家への「饗庭塩」献上について、都立図書館や国会図書館にもその資料はなく、西尾市の学芸員の方も文献はないとの事でした。墨田区の「たばこと塩の博物館」では、こんな面白いストーリーが史実なら、塩の研究をしていた学者が論文で残していたはずで、それがないので創作だと言っていました。しかし一方で、人手不足から解明されていない江戸初期の古文書が多くあるので、それを調べればわかるかも知れないとも言っていました。古文書があれば、佛教大大学院で赤穂の田淵家の塩の研究をしている千原さんに解説の協力をお願いする事も考えましたが、上記の調査で終わりにしました。

それに我々が調べているのは「坂越の廻船と赤穂塩と坂越の船祭りの関係」で、そこまで踏み込む必要はないからです。

しかし、赤穂塩に関連した事は調べる必要があったので、江戸期の歯に関する文献を調べました。こうして氏の「江戸の入れ歯師たち」や「噛む」から、1854年四壁庵茂蔦著「わすれのこり」と1855年山崎美成著「赤穂義士随筆」から江戸での赤穂塩のの人気ぶりがわかりました。やはり長谷川氏は日本の歯の大家だったのだと思いました。

これらの中で堀部安兵衛が、歯磨き粉で赤穂の焼き塩で、江戸で最も有名だった芝の「かねやすゆうげん」の店の看板を書いた絵を紹介していました。その堀部安兵衛の書いた看板の1枚は、去年の12月に赤穂観光協会の鍋谷会長ら4人で泉岳寺に行った時、赤穂義士記念館で私が見た看板でした。また大高原吾も麴町の歯医者だった小野玄入の看板を書いていたのは、赤穂塩が江戸では一番人気だった話につながります。

「かねやす」は今も残り、写真の所に電話してみると江戸期は塩を含んだ歯磨き粉を売っていたと言っていました。これで、赤穂塩の史実と、江戸での吉良の塩を創作し、面白く書いた架空の話だとの結論が出ましたが、長谷川氏の本から赤穂塩には江戸でもドラマがあった事を知りました。

長谷川氏は富岡儀八著の「近代の塩道」（1986年刊）にも書かれていた、美濃塩が瀬戸内の移入塩にはまったく歯がたたなかった事を、手掛かりにしてシナリオを考えたのかも知れません。赤穂塩が江戸まで大量に運ばれるようになった流れと背景について、これまで調べてきた中から紹介します。

坂越の廻船が日本海で活躍していたのは、赤穂塩の生産原価が山形の例で20倍も安かった事に関係していたと推測しています。

新潟県通史3巻には播磨の廻船は船の安定の為に船底に大量の塩を積み航行していたと述べられていました。この記述から坂越の廻船も船底に大量の赤穂塩と積んでいたはずで、これが莫大な利益をもたらしたと考える事が出来ませんが、具体的な文献を見つけた訳ではありません。しかし播磨等の北前船の活躍で、日本海側では塩の生産者に打撃が出て次々と塩の製塩が消えていった記述は新潟県史等にありました。

山形の例の20倍のかい離がいつまでも続かないもので、赤穂が入浜式を教えた竹原が瀬戸内の多くの地域に教えた事や、各地から北前船の参入が相次いだ為に次第に採算が悪化していったようです。これで瀬戸内の廻船は衰退していった中、坂越の廻船は江戸への塩廻船へ軸足を移していった事は広く知られています。この江戸への廻船で赤穂塩が有名なり、更に加速していた背景が長谷川氏の著書からわかりました。

「歯の風俗誌」には、巻末に50冊以上の参考文献が掲載され、この中に江

戸期の赤穂塩の事がまだ書かている可能性があります。

その多くは国会図書館にしかないものなので、また探す事にしています。

赤穂で完成した入浜式塩田は、昭和28年鹿島建設によって流下式に変わるまで300年以上続き、吉良町もまた、昭和29年鹿島建設によって太平洋側で唯一流下式の工事が始まっていたのです、その流下式も国の政策により共に閉じていました。

□終わりにこの14号を書くにあたり西尾市の郷土史家の加古文雄さんには随分お世話になりました。

吉良町の塩田跡等を丁寧に車で案内して頂いたのは去年の事でしたが、その時「饗庭塩」は岡崎の八丁味噌に用いられ「塩の道」を經由して長野県伊那地方や塩尻まで運ばれにがりが少なく良質だと珍重されたと説明して頂きました。その加古さんとこの12月に再開する事が出来ましたが、去年から続く交流で浅草では楽しい時間が持てました。最後にこのシリーズをお渡しして来年3月にも再編集して出版する話をしました。その時に加古さんからはとても暖かい声援を頂きました。

投稿者 矢竹考司（北前船と赤穂塩、坂越の船祭り調査委員）

発行者 門田守弘（坂越のまち並みを創る会会長）